

# 視点・論点・ところてん

## 「教職員の多忙化問題を考える」①

「忙しすぎて、心の余裕が保てない。」最近の学校現場の忙しさはどこから来るのか、この先、どのように私たちはこの忙しさと対峙していけばいいのかを、現場で働く立場から見解をのべていきたいと思う。

### 教育現場の実状

2014年6月25日、OECDは「国際教員指導環境調査（TALIS）結果を発表した。

日本の教員の1週間当たりの勤務時間は参加国最長の53.9時間（参加国平均38.3時間）であった。

この結果を受けて、全国の公立小中451校の校長や養護教諭、事務職員など11職種、計9848人を対象に2014年11月時点の調査を文科省が行った。この調査によると、教諭の1日の平均在校時間は、小学校11時間35分、中学校12時間6分。自宅に持ち帰る仕事もあり、それぞれ1時間36分、1時間44分だった。

その上で、学校の業務を71に分けて負担に思うかを尋ねた。教諭のおおむね7割以上が従事する業務のうち、「負担」「どちらかと言えば負担」の合計が高かったのは「保護者

や地域からの要望、苦情対応」と、「研修会の事前レポートや報告書作成」。このほか、負担感だけで見ると「国や教育委員会の調査対応」が9割近くで最も高かった。

一方、今年の国際調査で週7・7時間と参加国平均の3倍を上回った部活指導の負担感は、中学教諭でも48・5%と5割を切った。「負担だがやりがいがある」という答えが多かったという。

※下線部は朝日新聞デジタル2015年7月28日の記事より引用

### 負担を感じる仕事、そうでない仕事

上記の結果をみると、平均勤務時間は11時間半から12時間、持ち帰り時間も合わせると13時間以上は仕事をしていることになる。これに対して教職員は4%の調整手当が付けられており、残業代が出ない。この4%という数字は昭和41年度、文部省が実施した「教員勤務状況調査」の結果より、当時の平均超過勤務時間が1時間48分であることより、1週間平均の超過勤務時間が年間44週にわたって行われた場合の超過勤務手当に要する金額が、超過勤務手当算定の基礎となる給与に対し、約4%に相当するというこ

から、現在にわたっても引き続き行われている。しかし、これは時間で直すと1日当たり19分12秒という時間になり、前大阪市長の大好きな「民間」に当てはめると、毎月4%の調整額で19分12秒を超えて残業してもらえることは、経営者から見ればありがたいことであり、本来ならありえないことである。

しかし、教職員の仕事は前述した調査結果にあるように、部活動などの諸外国から比べると3倍もの時間を費やしているのにも関わらず、負担感を感じている教員が少ない仕事がある。いわゆる「やりがいがある仕事」である。

## やりがいが自分を追いつめる！？

自分が主体的になって関わる仕事に対しては負担感を感じる事が少ない。考えてみれば当然なのであるが、教員の多くは「子どもたちの未来のために」とやりがいを感じて、また責任感をもって仕事に向き合っている。だから、残業代が出なくても、時間をかけて業務に取り組み、頑張っって耐えているのである。まじめな(!?)教員ほど、すべての業務に手を抜かず取り組み、忙しさを増しているのではないだろうか。「教員として業務すべてに取り組むことは当たり前だろう」と言われそうだが、しかし、限界を超えたときに、人間は楽になろうとする気持ちが働く。自分の身を守るための防御反応であり、本能として当然の事なのだが、そこを無理してしまうと精神的に追い詰められていくことになる。

ここに評価育成が入ってくると、他者の評価が気になり、もっと追い詰められていく。教職員の精神疾患患者数は、平成25年度は病気休職者の60.4% (5,078人) を占めた。そのうち約半数が所属校勤務2年未満の者となっている。

## 仕事にこだわるということ

あまりの忙しさから様々な対応がとられている。スクールサポート事業、民間業者による訪問授業などなど。一見教員の負担を減らすためにはいい取り組みだと思われるが、果たしてそうだろうか。

私たちが仕事にこだわり、自分で授業を考えることを止めてしまうと、そこに政治的な圧力や競争原理、新自由主義などの側面が学校現場に持ち込まれることもなくはない。忙しい中だからこそ、自分がこだわる内容、時期を定めて実践を行わなければ、学校は社会的な流れが大きく入り込んでくる場所なので、現在の経済中心主義的な思想がどんどん入り込んできてしまう。

効率的、効果的、費用対効果といった言葉が教育の場でも平然と語られ、子どもたちがあたかも商品のように扱われる、そんな学校現場にどンドンなってはいないか。

だからと言って、すべてを自分で考える時間はない。1年に1回でいいから自分がとことんこだわりぬいた実践ができればとは思う。それが、自分自身を守る一番の方法だ。

(文責：東條)

